

演出とリアルフォトの融合

～『童暦』に見られる特異性の構築～

LIN Yichen

本論文では植田正治(1913年～2000年)の『童暦』(1971年)に着目し、『童暦』を通して作風の特異性の構築について考察する。本稿は三章に分け、『童暦』の刊行背景を提示し、編集作業と制作技法における二つの観点から作品分析を行う。『童暦』について再考することを通して、植田正治が制作における特異性を具体的に示し、明白することを目指し、そして『童暦』の新たな意味づけや捉え方を発見することを目的としている。

植田正治は写真表現についてのあり方と考え方が激動する規制の厳しい環境に置かれながら、現在のように多様な作風が普遍的に受け入れられることが許されない条件の中で、自分の表現にこだわりつづけ、独自のスタイルを確立させた。写真史の流れにおいて特例的な存在とされていた。その中で自分の作風をこだわる姿勢が特に見えるのが『童暦』である。『童暦』は1971年に刊行され、1950年代から1970年代までに写真雑誌で掲載された作品をまとめた作品集のことで、社会的リアリズムの風潮によって代表的な表現である「演出写真」を控え、山陰地方の子どもたちを自然にリアルに捉えた写真集である。その自然的でストレートフォトとしての側面が高く評価され、山陰の風土写真集としても意味づけられた。それまでの植田の作品とは異質な作品として評された。しかし、そのなかからどこかに植田が得意とした「演出写真」の影が見え、ストレートフォトでありながら、演出的な側面も見せている。『童暦』から、植田が写真に対する姿勢だけではなく、その作風の成立も見られるのではないかと考える。本研究では、『童暦』に着目し、対立的であるはずのリアルフォトがどのように演出的な写真と融合されていたのか、またそこにおいて植田の作風がどのように構築されていたのかについて考察していきたい。

第1章『『童暦』とその背景について』では、今まで植田正治についてどのように定義されてきたのか、という植田の作家性としての背景と、本論文のテーマである『童暦』が刊行された背景や、『童暦』の撮影地としての山陰地方の背景について考察しその定義を提示した。植田正治には

今まで「地方作家」、「風土写真家」としての一面もあれば、演出的で創作性の高い写真家の一面も有している。また、『童暦』が刊行された背景として、既存の枠組みへの問いかけ、そして写真の可能性と方法論の探求など「写真」への再考が行われたという背景があった。

第2章「作品分析—編集の観点から」では、『童暦』の編集について着目し、編集の意図についての考察を試みた。編集によるイメージの構成ということ主眼に置き、『童暦』の四季の編成や写真並びに焦点を当てた。構図、被写体などの関連付けで不統一な時期に撮影された作品をつなぐのだけではなく、編集における「象徴性」や「対比性」などの文脈で過去とつながるといった意味合いも見せる。

第3章『童暦』の被写体と様式』では『童暦』の被写体について注目した。『童暦』を出発点として、植田が多用するモチーフに着目し、そこにおける象徴性や意味作用について考察を行った。類似なモチーフを使うことによって象徴性を持たせることにつながり、またモチーフの違いで観客の視線を誘導していき、イメージが形成されていく。『童暦』はリアルフォトとしての作面が強くなりながら、このような手法で「演出写真」としての側面を帯っていく。そうしたものがリアルフォトと演出写真を融合し、そこに特異性が見られる。そして既存の枠組みによる厳しい制約が課され、価値観を強要させられる時代において、植田はその枠組みから脱して、自分の意思で創作し続けていた。全ての枠が植田の作風をはめきれないという点と、各ジャンルの作法が作品の中に見え隠れているところが『童暦』の特異性を形成させていくということについて本論文を通して考えていく。